

能 アントニーとクレオパトラ

宗片邦義

時、紀元前一世紀

所、エジプト北部の市アレグザンドリア

曲柄、現在能。Cf. 『EJ』『砧』『楊貴妃』（所要時間、一時間半）

人物

前シテ・・・マーク・アントニー（ローマの武将、三執政官の二）

トモ・・・イーロス（アントニーの部下）

間（アイ一・二・三・四・・・クレオパトラの使者、および

アレグザンドリアの住人

後シテ・・・クレオパトラ（エジプト女王）

ワキ・・・オクテーヴィアス・シーザー（ローマ三執政官の二）

ワキヅレ・・・その部下

トモ・・・クレオパトラの侍女

地謡、囃子（笛・小鼓・大鼓）

前場

「シテ（アントニー）、トモヲ従エ登場。橋掛り中程カラ」

シテ「憎きはあの、エジプトの魔女。ナイルの、雌蛇。三度男を変え

た、尻軽奴。今度は青二才のオクテーヴィアス・シーザーに、こ

のわしを売り渡した

地「信じていた。それがすべてお終いに。裏切り者よ

上歌「目ばたきが。強者共を狩り出だし。呼び戻し。愛と精気に満ちた胸。

その胸がわが王冠。生き甲斐だった。それに目を眩くらまされ。お前の心も。俺のものと思っていた。俺は身も心もすべてを捧げ。お前のために戦ってきた。今や全てを失った

詞 確リ
シテ「泣くな、イーロス。あの魔女には、死んで償つぐなわせてやる

〔間一（クレオパトラの使者）登場〕

畏マツテ
間一「エジプト女王クレオパトラ様の使者でございます

ツヨク
シテ「貴様の主人は俺を裏切って、ローマに寝返った卑劣な女よ。
死刑にしてやる

間一「人は二度死ぬわけにはゆきません。女王の最後のお言葉は「アントニー様。ご立派なアントニー様」でした

シテ「なに、女王が死んだと

間一「はい、お亡くなりになりました

〔静寂。間一、静カニ切戸口へ〕

シットリ
シテ「すぐ追いつくぞ、クレオパトラ 「許してくれ
カカル・ヨロ

上歌・合・ツヨ
地「この上は。生き長らえるもただ呵責かしやく。松明の灯が消えてしまつ
たいまつ あかり

ヨワ
た「覚えているかいクレオパトラ。かつてお前はわしに訊ねたね
「どこまで愛されているか。その果てを見極めたい」と。それに
わしが答えた シテ「それには新しい天地が要いると

サラリ
地「女王自ら死んで。敵の大將オクテーヴィアス・シーザーに。私の
征服者は私。と思い知らせたのだ

詞
シテ「すぐ行くぞクレオパトラ。待つていてくれ」カエテ「イーロスよ。か

つて誓ってくれたな」ウケテサラリ地「この身に恥辱が迫った時には。命めい

に应じて直ちにわしを殺してくれると

上歌・ソヨ・合

地「お前はわしを殺すのではない。敵のオクテーヴィアスを刺す

のだ。なに。できぬと言うのか。お前を自由の身にしてやった時。

命じられれば何でもやると誓ったではないか（間）ついにイ

ーロスは。泣き泣き。その剣を抜き。それならどうかそのお顔。

世界中が仰ぎ見たそのお顔を。背そむけてください。と頼むや。その

剣を。おのれの胸に突き刺した

「刺ス」

「後見付キ添イ切戸口へ」

シテ「見上げた男よ」サラリ地「かくてイーロスは主人に教え。美名びめいを。留とど

めたり」カエテ「さあ急げ。クレオパトラの待つ国へ」

「アントニー自ラヲ刺ス」

シテ「ええい。まだ死なぬ。誰か形をつけてくれ」抑エテ

「間二（クレオパトラの使者）登場」

間二「はてあの声は。や。これはアントニー閣下。いかがなさいまし
たか」シテ「誰かとどめを頼む」

間二「これはクレオパトラ女王の使いでございます

シテ「何。クレオパトラの。いつお前を」氣ヲカエ間二「只今でございます

「静寂」

シテ「生きておるのか」間二「霊廟れいびやうの中にお身を隠しておられます。先

に、お亡くなりになったと遣いつかを送られましたのは、アントニー閣下の、女王裏切りのお疑い、そのお怒りを解くためにございました。その後、その結果が怖くなり、私を遣わされてございます。ですが、遅すぎたようでございます

シテコメ・ふたまたまたか二股掛けおったか、あの女。芝居のうまさ想像を絶している

地ツヨ・抑エテ「遅かった。もうわしには命がない。魔性ましようの女。(間)「死に神カエデ

よ。暫しの猶予を。最後の頼み。クレオパトラの唇に。連れて行け。(間)魂が。ああ魂が、この肉体を脱けて往く

〔後見ニ助ケラレ切戸口へ〕
〔中入〕

間語あいがたり 〔間三(クレオパトラの使者) 登場〕 (一) 内、適宜削除

間三「これはエジプト女王クレオパトラ様にお仕えする者です。

女王様には、アクチウムにおいて、アントニー殿と共に敗戦の憂き目を見られ、いまや唯一の所領であります霊廟にこもっております。

さてこの度は女王様の使いとして、敵軍の大将オクテヴィアス・シーザー殿の御意をお伺いに参上致し、只今女王様の元へ帰るところでございます。

ところで、オクテヴィアス・シーザー殿は、こう女王に伝えよとおしやった。「何よりもまず、安心なさるよう。女王という立場を十分に考慮し、決して恥辱は与えない。私の性格として粗暴な振る舞いは致さぬ。必要な慰めは何なりと所望されるがいい。ただし誇りに満ちた女性ゆえ、自暴自棄なことをされては困る」と。

そして独り言のように、「生きてローマに連れ帰れば、凱旋の榮譽となり、あれの名も永遠のものとなるう」と。オクテヴィアス様は、気高いお心をお持ちの方とお見受けした。

さて、クレオパトラ様のところへ急がねば。

【それにしても・・・考えてみれば、クレオパトラ様の最初の結婚は、あれは

一八歳のとき。お相手は弟のプトレマイオス十二世だった。二年程はお二人でこのエジプトを統治なされた。だがまもなく女王は追放されて・・・あれはなぜだったかしらん。しかしジュリアス・シーザーのエジプト遠征を上手く利用なされて、再び王位に就かれた。そしてその下の弟、十五歳のプトレマイオス十三世と結婚された。それから女王はもっぱらジュリアス・シーザーとローマで、それはそれは楽しく日々を過ごされた。

しかしそれから二年程して、そうあれは三月十五日のことだった。今でもはつきり覚えていて。年は紀元前四十四年。シーザーの妻のカルパーニアが朝方、不吉な夢を見た。それがなんと、ローマ市街に建っているシーザーの胸像が、血を吹いている夢だった。

一体、夢というものは、何だろう。なぜって、シーザーはその日、元老院で暗殺されたのだから。キャシアスとかブルータスとかの手にかかって。「ブルータス、汝もか」これがシーザーの最期の言葉だった。クレオパトラ様にこの知らせが届いたのは、その夜遅くだった。あの日は朝から胸騒ぎがするとおしやつて・・・でも何事も無くお寝みになろうとした、その時だった。それにしても、なぜクレオパトラ様にもそんな予感があったのだろう。女だけ感ずるものだろうか。あの夜、館の者はみな、号泣した。アントニー殿が見えたのは、三日目の夜だった。唯一の頼みの綱。ひと月後、アントニー殿に見送られて、クレオパトラ様はローマを後にした。亡くなったシーザーは五十五歳。クレオパトラ様は二十五歳の若さだった。ついでながら、アントニー殿はその時三十九歳でした。

それから三年後、お二人は再会されたのです。アントニー殿からご招待があつて、クレオパトラ様は十二隻の船団を組まれて、アレグザンドリアから沿岸沿いに、タルソスへ訪ねて行かれた。あの豪華さは未だに忘れられない。アントニー殿は身も心も、完全に魅了された。

クレオパトラ様がアレグザンドラに戻られると、今度はアントニー殿がやつて来た。殿の溺愛ぶりは、身内の私共から見ても、目に余るものだった。アントニー殿はクレオパトラ様のことを「これこそわが宇宙」とまでおしやつた。さらには「王国などは土くれ同然。人生に貴いものは、これだけ。これ程愛し合う男女がこうして抱き合うならば、もうほかには何が

要るものか」と。

しかし、殿に対するクレオパトラ様のお言葉は、甘いものではなかった。「ファルビアを妻にしながら、愛していないなんて嘘よ。私は世間の目には阿呆としか映らない。どうせ貴方は目が覚めて、そちらへ帰って行くに決まっている」と。するとアントニー殿は「何と向こうつ氣の強い女だ」と言いながらも、「この女には何でも似合う。叱るも、笑うも、泣くも怒るも。何をやっても美しい」と。アントニー殿は心底愛しておられた。ところがクレオパトラ様は「私はすぐ気分が悪くなる。かと思うとたちまち直つてしまふ」という女だった。言葉なんかまるで信じていない。でも相手には自分の言うことを信じこませる。そんな女だった。「私は愛に仕えたりはしない」ともおしやつた。」

ところで、不思議な噂が流れている。アクチウムの海戦に破れた後のことだ。アントニーを暗殺するようにという、オクテーヴィアスの要求を、女王が受け入れたという噂だ。それに、アントニーの妻はオクテーヴィアスの姉だとか。(間)ご自分のことを「亡くなった」とアントニー殿に知らせたのも、それだということだ。そうだったのだろうか。私にはとてもとても想像だにできないこと。[考エ込ム]

さてさて、ともかく急ぎクレオパトラ様のところへ帰らねば。

「入ル」

〔間四 (アレグザンドリアの住人) 登場〕

間四 「これはこの辺り、アレグザンドリアに住む者です。

さてここに不思議なることが起こりまして、わたしはその目撃者の一人です。と言いますのは、先程アントニー將軍が、息も絶え絶えの状態で、女

王のおられる靈廟へ運ばれて参りました。

不思議なことで申すは、女王様はその時、靈廟の門を固く閉ざしたまま、お開けにならなかったということです。先程まで、もう一度お会いしたいと公言しておられたのに。

それではどうなさったかと言いますと、高い靈廟の上から、鎖網くさりづなを投げ降ろし、それに結ゆわえさせて、ご自分と二人のお付きの女の三人でその網を引つ張って、引き上げたのでございます。その間に、アントニー殿は血まみれになってしまわれ、それは見るも無残な、哀れなお姿でございます。私はあのような悲惨な光景を、いまだかつて見たことがありません。それから、女王様はへとへとに疲れておられたにも拘わらず、ご自分のなりふりも構わずに、血まみれの將軍を拭いてあげ、それからベッドに寝かせて、「私の主人、皇帝」と叫ばれたのです。私共はそれを大勢で見えておりましたのでございます。

アントニー殿は、喉が渴いておられたのでしょうか、ワインをくれとおしやつて、それを飲み、最後にクレオパトラ様には生き永らえるよう言い残して、亡くなりました。かつては人類の偉大な指導者であられたお方の最期としては、それは余りに痛々しい惨めなものでございました。噂をすれば影とやら。向こうに女王様がお見えになりました。

「入ル」

後場

〔後見、一疊台ヲ地謡前ニ据エル。後シテ（クレオパトラ）、トモ（侍女）ヲ伴イ登場。一疊台ニ上ル〕

一セイ・ツヨ・不合

シテ「もう何も食はず飲まず。眠りもせぬ。いずれ朽ち果てる生身なまみ

やかた

みずか

ほろ

し

の館。自ら滅ぼすに如くはなし

サシ・ツヨ・サラリ

地

「シーザーの意のままになり。喚わめき叫ぶローマの群衆さむらいの。晒し

者になる位なら。いっそナイルの泥どろの上。裸のまま身を投げ出し。群がるハエに卵を産ませよう。いやわがエジプトの高くそびえる

ピラミッドを絞首台に。鎖でこの首を吊り下げよ

引立て・スラリ

シテ「伝えてくれオクテーヴィアス・シーザーに。クレオパトラは死なせてくれと言っている」と

上歌・ヨワ・タツブリ

シテ「美しい夢を見ていた帝王の地」美しい夢を見ていた

ウケテスラリ

帝王の。アントニーなる帝王の。大空のようなあのお顔。楽の調

がく

べの美しい豊かな響きのあのお声。高く伸ばした両腕は。紋章

もんしやう

の頂きの鶏冠のよう。硬い両脚は。大海原に跨って。喜ぶ姿は

とさか

またが

水切る海豚。水中に住み背中水は水の面。その恵みには冬が無く。

いるか

みも

常に秋の恵みの豊かさ。刈るほどに生い茂る。緑溢れる王国島々。

みどりあふ

アレグザンダー大王の。果たし得なかった大理想

引立て

シテ「世界を一つの国として。万民に平和な暮しをと夢見た貴方と私

ばんみん

あなた

地「ローマとエジプト力を合せ。きっと実現できますと

優ニスラリ

シテ「ああ。あのようなお方にもう一度。お会いしたい地「あの

ウケテ

ようなお方と共に眠りたい

「ワキ（オクテーヴィアス・シーザー）、

ワキツレ（部下）ヲ伴イ現レ、橋掛リ一ノ松辺リデ」

詞

ワキ（オクテ）「これはオクテーヴィアス・シーザーと、申す者。マーク・アントニーを生け捕りにせよと命じておいた。そのアントニーが、

亡くなった。「アントニー。君の死には。心臓の血にも等しい。
 貴い涙を流し。哀悼す

地「好敵手なりし。帝国統治の協力者。戦場の同志片腕。だがつい

に融け合わぬ運命の星。提携を破り破局に至る

「ワキ、舞台二入り、ワキ正面遠クヲ見ツメ」

ワキ「全人類の指導者たる資質を持ちながら

地「美德と弱点のせめぎ合い。欠点を持たぬ者はない

ワキ「君は我らが自分を写し見る大きな鏡。君の死に心から哀傷す

「舞台正面二向キ」

「さあ。世界には平和が。オリヴを飾り立てて寿こう

地「さてその後。クレオパトラに対面すれば。女王恭しくひれ伏して

シテ「今やわが主。世界が戴く唯一の主君よ。わが全てはアントニー

が怖さ故に 地「と抗弁すれば。オクテーヴィアス。彼女の容姿

と巧みな言葉に動かされず。逆に全てを。クレオパトラの所為に
 せり。突然彼女は態度を変え

シテ「死ぬのは怖い。生かして欲しい 地「と。持てるすべての。

莫大な財産目録差し出せば。すかさず彼女の財務官が。それ以外

に隠し物ありと暴露せば。慌てる女王にオクテーヴィアスは。優
しく微笑み。全てを許し。与え

ワキ「女王として丁重にもてなし。決して恥辱は与えない

地「とて。ローマ行きを約束させ。そのまま先に。帰途につく。その
まま先に帰途につく

(ワキ、幕二入ル)

シテ「言葉など。生きてゆくための方便。私は言葉に騙されぬ。彼の言

葉に心はなし 地「意のままにならぬ男の意のままにならぬ女

シテ「戦いには破れても。私は決して破れない 地「勝ち誇ったオクテー

ヴィアス・シーザーの。凱旋の飾り物にこの身を曝せようか

シテ「毒蛇には牙もあり。私は世界の征服者の征服者

地「エジプト女王クレオパトラに。女の気持ちは微塵もなし。頭の

頂から爪先まで。私は堅固な大理石。貴方はかつて私のことを。

年もその美を蝕まず。無限の変化を見せる女と。「さあ私に。

最上の晴れ着と王冠を。さあ早く。アントニーが呼んでいる

シテ「いま行くわ。私の夫 地「今は永遠への憧れに

シテ「私は火と風。五体はこの世の。土と水に還してやる

(I have / Immortal longings in me. Husband, I come.
I am fire, and air; my other elements / I give to baser life.)

〔舞〕

合・ツヨ・タップリ
シテ「私は火と風 地 「五体はこの世の。水と土に還してやる。
それから女王は男から。イチジクの籠を受け取れば。中にはナイ
ルの毒蛇が。人を殺すが痛みはない。死神の使いが隠れている。
楽に死ねるあらゆる手立てを求めきたり

(She hath pursued conclusions infinite / Of easy ways to die.)

女王はお付きを下がらせて。やがて毒蛇をその胸に

シテ「かわいいお前。さあ一思いに 地「鋭い牙で噛み切っておくれ

シテ「ああ麻薬のように快く 地「空気のように柔らかい シテ「お

お、アントニー 地 「お前にも吸わせてあげようと。クレオ

パトラはもう一匹の。毒蛇を取って。胸に当て。うぶ毛の生え

た柔らかな。瞼を静かに優しく閉じた

キリ

〔橋掛リニ、オクテ・ヴィアス・シーザー現レ、舞台ニ入ル〕

地 「これを予感し虞れ。引き返し来たるオクテ・ヴィアス・シーザー

ワキ「権力のために。愛と心を犠牲にす。されど潔き立派な最期。礼

を尽くし。アントニーの傍らに埋葬せよ 「この地上に。か
ほど世界に名高き二人を。共に納むる墓あるまじ

(She shall be buried by her Antony. / No grave
upon the earth shall clip in it / A pair so famous.)

合・ヨリ、カエテ

おうじん

うるわ まな

地 「東方の星クレオパトラ。黄金の太陽もかほど麗しき眼に。二

度と仰ぎ見らるることあるまじ。類なきナイルの女。クレオパ
トラ

注…ローマの將軍ジュリアス・シーザー暗殺後、クレオパトラのローマ脱出を助けた
マーク・アントニーは、三頭政治の一勇として東方を制圧、クレオパトラに再会。その
後の二人の半生、そして最期を描く。原作シェイクスピア。素材は、『プルターク英雄
伝』による。

なお本作は二〇〇〇年に上演した創作能『クレオパトラ』（原台本上田邦義、能作・
演出・シテ津村禮次郎、協力エドワード・ホール、新国立劇場小劇場）の改訂版である。

批評。「美を極めた舞台でした。能装束に面を着たシテから私が得たイメージは、女性
としての極めて人間的なクレオパトラの姿です。象徴化によって「永遠」を凝縮し、過
去も未来も現世と来世をも齊しく同じ場に置こうとする能の演出が、かえってリアル
な印象を私に抱かせたのかもしれない。「能・ハムレット」も「能・オセロー」も同
様に美しい夢のような能です。宗片作品は、人々の魂に直接語りかけ、生きることの
目的を教えてくれる。能『クレオパトラ』も、やはり我々を悟りへと導く救いの芸術
でした」（竹内正人 2000）

Noh Antony and Cleopatra

By Kuniyoshi Munakata

Plot: John Masefield wrote: "It is a long and sometimes weary road to the great
last act...Cleopatra is the only Shakespearean woman who dies heroically upon the
stage. It may be claimed that her death scene is the most beautiful scene in all
tragedies." *Noh Antony and Cleopatra* pursues this long tragedy of a man who is
ruined by his love for her as well as her last.